

## 第四章 紫の君の物語 嫉妬と姫君への関心

[第一段 二条院に帰邸]

殿におはして(二条院にお帰りになって)、とばかりうち休みたまふ(光君は少しの間休息なさいます)。山里の御物語など聞こえたまふ(夫人には桂での様子をお話になります)。

「暇聞こえしほど過ぎつれば(予定の日程を過ぎたのは)、いと苦しうこそ(大変申し訳なく思います)。この好き者どもの尋ね来て(部下の遊び好きどもが桂まで尋ね来て)、いといたう強ひとどめしに(それはもう強引に引き止めるもので)、引かされて(それに応じてしまいました)。今朝は、いとなやまし(もう疲れました)」

とて、大殿籠もれり(お眠りになりました)。

例の(目覚めると夫人は例によって)、心とけず見えたまへど(光君の誠意を疑っているように見え為さったが)、見知らぬやうにて(光君は心当たりは無いものの夫人の物思いを慰めるかのように励まして)、

「なずらひならぬほどを(どんな問題でも立場で意味が異なるのは当然なので)、思し比ぶるも(比べて思い悩むのは)、悪きわざなめり(悪い癖です)。我は我と思ひなしたまへ」

と、教へきこえたまふ(助言なさいます)。

暮れかかるほどに(夕刻に)、内裏へ参りたまふに(参内なさる間に)、ひきそばめて急ぎ書きたまふは(光君が隠すように紙を引き寄せて急いでお書きになる手紙は)、かしこへなめり(大堰の明石君宛てなのでしょう)。側目こまやかに見ゆ(傍目にも情愛が深そうに見えます)。うちささめきて遣はすを(光君がごくこっそりと手紙の使者に遣いを言い付けなさるのを)、\*御達など(二条院の女房たちは)、憎みきこゆ(不審に思い申します)。 \*「御達(ごたち)」は<婦人の敬称である「御」の複数。>と古語辞典にある。

[第二段 源氏、紫の君に姫君を養女とする件を相談]

その夜は、内裏にもさぶらひたまふべけれど(光君は宮中に宿直する予定でいらしたが)、解けざりつる御けしきとりに(機嫌の悪い夫人を宥めようと)、夜更けぬれど(夜も遅かったが)、まかでたまひぬ(帰宅なさいました)。

ありつる御返り持て参れり(そこへ明石君からの御返事を使者が持って帰って参ったので、)。え引き隠したまはで(光君はそれを夫人にとても隠し切りなされずに)、御覧ず(そのまま聞でお読みになります)。ことに憎かるべきふしも見えねば(特に夫人が嫌がるような睦み言などは書いていなかった)ので光君は夫人が読んでも構わない素振りで前に置きなさせて、

「これ、破り隠したまへ(此れは破り捨ててください)。むつかしや(邪魔ですから)。かかるものの散らむも(こんなものが部屋にあつて狭くなるのは)、今はつきなきほどになり(もう今は似合わない年に私はなっていました)」

とて、御脇息に寄りゐたまひて、御心のうちには、いとあはれに恋しう思しやられるれば、燈(ひ、ともし火の揺らぎを)をうち眺めて、ことにものものたまはず(特に何も仰いません)。

文は広がりながらあれど(手紙は広がったままでしたが)、女君(紫君の)、見たまはぬやうなるを(御覧にならない様子に光君は)、

「せめて(敢えて)、見隠したまふ御目尻こそ(見ない振りを為さる御眼差しこそ)、わづらはしけれ(わざとらしいですよ)」

とて(とからかつて)、うち笑みたまへる御愛敬(ごまかし笑いを為さる打ち解け顔が)、所狭きまでこぼれぬべし(部屋いっぱい(に)明るく溢れて空気を和ませます)。さし寄りたまひて(すると光君はすかさず紫君に差し寄りなさつて)、

「まことは(実は)、らうたげなるものを見しかば(幼子に会ってきまして)、契り浅くも見えぬを(血のつながりを深く感じましたが)、さり(と)て、\*ものめかさむ(と)ほども(正式の姫君と言うには)憚り多かるに(差し障りが多いので)、思ひなむ(と)わづらひぬる(困っているのです)。\*「ものめかす」は<重んじて扱う。大切な物と見えるように取り成す。>と古語辞典にある。一才の「もの」と「粧す」、という語感だろうか。此処での其也の「物」とは<正規の姫>。

同じ心に思ひめぐらして(私と同じ気持ちで考えて)、御心に思ひ定めたまへ(貴方の考えをお決めください)。いかがすべき(どうするべきでしょうか)。ここに(この二条院で)育み(はぐくみ、貴方が育て)たまひてむ(と)や(と)為(と)さ(と)つ(と)て(と)下(と)さい(と)ませ(と)んか)。\*蛭の子が齢にもなりにけるを(三歳になりましたが)、罪なきさまなるも思ひ捨てが(と)たう(と)こそ(今は無邪気な様子でいてもいつまでもそのままにも出来ませんので)。\*「蛭の子が齢(ひるのこがよはひ)」は注に<三歳。『日本書紀』神代紀の故事に基づく。>とある。「蛭の子」はイザナキとイザナミの間に儲けた最初の子で、3歳になっても足がたたないので「思ひ捨て(諦め)」られて、舟に乗せて海に流された、とされている。したがって、この言い回しは単に<年齢が3歳になった>と言っているのでは無く、貴方に「思ひ捨て(見捨て)」られたら「罪なきさまなる(らうたげなるものも)」入内に足る一人前には成れずに、舟に乗せて海に流されるかもしれない、と情と理に訴えている。というか、教養ぶった優しさを見越して無理強いする小賢しさというか、まるで他人事のような無責任さを感じさせる、気に障る言い草である。と、私が憤慨しても何の意味も無いが。

\*稚気成形なる下つ方も(いはけなげなるしもつかたも、着袴の儀を)、\*紛らはさむ(と)など思ふを(祝ってやろうと思いますが)、\*めざまし(と)思(と)さ(と)ず(と)は(と)目(と)障(と)り(と)と(と)御(と)思(と)い(と)で(と)な(と)け(と)れ(と)ば(と)、\*引き結ひ(と)たまへ(と)かし(腰結いをしてやって親代わりを引き受けてくれませんか)」 \*「いはけなげ」を<稚気成形>と書いたのは我流の当て字だが、「幼け、稚け」だと「いはけ」ではなく「いとけ」となるらしい。どちらもほぼ同じく<子供っぽい>という意味のようだが、「いはけ」には<邪心が無い、あどけない>、「いとけ」には<幼稚、愚か>という語感があるらしい。また「下つ方」は部位指示で、この場合は下部の衣服である<袴>であり、「いはけなげなる」と修辞された<子供らしい袴>とは「袴着(はかまぎ)」を意味するらしい。「袴着」は<幼児が初めて袴をつける

儀式。古くは3歳、後世では5歳または7歳に行い、しだいに11月15日の七五三の祝いとして定着。着袴(ちゃっこ)。>と大辞泉にある。なお、注には<袴着の儀を婉曲的に言う。>とあるが、「袴着の儀」は元が男児の成長祝いだったとすれば、女兒に対しては寧ろ日常ではより柔らかい表現の「いはけなげなるしもつかた」ないし其れに類する言い方をしていたと考えたほうが、この会話文の雰囲気に合う気がする。\*「紛らはす」は<はつきりさせない、ごまかす、隠す>とあり<儀式を目立たないように執り行う>と字面では読めるが、天下の内大臣が隠れて祝儀をする理由など無い。仮に誰かに隠すとすれば、それは今相談を持ちかけている相手の紫君こそであってみれば、此処の「紛らはす」は<気を紛らす→気を晴らす>の方の意味であり、姫が晴れの日を迎えるように<祝ってやる>に違いない。\*「めざまし」は良くも悪くも<驚くほど>の語感だろうが、此処では<有り得ないほど厭な障害→目障り>とした。\*「引き結び(ひきゆひ)」は注に<袴着の儀で腰結の役をすること。>とある。「腰結い」は<袴着(はかまぎ)や裳着(もぎ)の儀式のとき、袴や裳の腰のひもを結ぶ衣紋奉仕の役。徳望のある人が選ばれた。>と大辞泉にある。儀式の最終的な仕上げを見届ける監督で、話意は<親代わりを引き受ける>だろう。

と聞こえたまふ(とお話し申しなさいます)。

「\*思はずにのみとりなしたまふ御心の隔てを(心外な事ばかり為さる殿の御心離れには)、せめて\*見知らず(敢えて目を瞑り)、\*うらなくやはとてこそ(寧ろすべて許して受け入れてこそ,)。いはけなからむ御心には(無邪気であろう姫君の御気持ちに)、いとよう\*かなひぬべくなむ(きつ良く私の心が通うのでしょう)」。\*「思はず」は古語辞典に<意外な、思いも寄らない>の意もあるが、<心外な、気に入らない>が先ず示されている。「思はず」なのは紫君で、「取り成し給ふ」のは光君である。\*「見知る」は実際に<見て知る>のだから<気付く>に近い語感。紫君の意思を感じる。\*「うらなし」は<隠し事のない、分け隔てない、相手を疑わない、心を許す、何も考えず>とある。此処では「御心の隔て」に対する反語だろうから<隔てない→事情に拘わらない>くらいかも知れないが、文脈を汲んで少し飛躍すれば<殿の不実を>すべて許して(姫君を)受け入れる>。ところで「うらなくやは」の「やは」だが、是は反語や疑問語ではない。「やは」は連語ではなく、それぞれが「(うらなく)や」という強調語と其の文体を受ける「は」だ。「うらなくや」は「せめて見知らず」の「せめて」に対応して<むしろ「うらなく」する>という意味になる。つまり「うらなくやはとてこそ」を逐語で言い換えれば<むしろ隔てなく接する事に拠ってこそ>となる。すると此処でまた、今度は「こそ」が何に掛かるのかという疑問が生じる。読み進めば「こそ」は「適ひぬべくなむ」に掛かるので、「こそ」で文節するのは誤りである事が分かる。\*「適ふ」は姫の「御心に適う」だが、<姫の気持ちに適合する>ことが何を意味するのか、言い換えれば<姫の気持ちに適合する>ことが何故必要なのか、を押さえないと意味がつかめない。要するに、自分が世話する事を承知したから、其れを上手く行うために<姫と打ち解けて仲良くなる事>が必要なのである。

いかにうつくしきほどに(姫はどんなにか可愛らしい事でしょうに)」とて、すこしうち笑みたまひぬ(紫君は少し微笑みなさいます)。稚児をわりなう(紫君は稚児を無性に)らうたきものにしたまふ御心なれば(可愛がりなさる御気性なので)、「得て(引き取って)、抱き(いだき、庇い守り)かしづかばや(育て上げたい)」と思す(と御思いに為ります)。

「いかにせまし(どうしたものか)。迎へやせまし(すぐ迎え入れるべきか)」と思し乱る(と光君は思い悩みなさいます)。渡りたまふこといとかたし(それに山荘へお出掛けになるのはそう簡単ではありません)。嵯峨野の御堂の念仏など待ち出でて(嵯峨野礼拝堂の読経会の日などを待って出掛けては)、月に二度ばかりの御契りなめり(おんちぎりなめり、御供寝のようです)。\*年のわたりには(年に一度の七夕の出会いよりは)、立ちまさりぬべかめるを(余程ましの様だが)、及

びなきことと思へども、なほいかがもの思はしからぬ(もつと幾度か多く会えないものだろうか  
と明石君は思ったことでしょう)。 \*「年の渡り」は<年に一度、彦星が天の川を渡って織女と会うこと。>  
と大辞泉にある。所謂、七夕伝説。

(2010年6月8日、読了。)